

オタクの原点を求めて—SF と『宇宙塵』—⁽¹⁾

佐々木 隆

はじめに

オタクの原点を考えるには本来は「趣味」から始めるべきかもしれない。しかし、そのことについては別の機会で取り扱いたい。オタクの原点、すなわちオタク前史ではいわゆる無線、鉄道、SF がよく取り上げられる。ここではSFに注目する。必然的に同人誌『宇宙塵』に触れることになる。

1 SFとは⁽²⁾

一般的にSFはScience Fictionと捉えられている。実際に『広辞苑』でもそのように定義されているのである。⁽³⁾ 福島正実編『SF入門』(1965)、野田昌宏『SF英雄群像』(1969)や長山靖生『日本SF精神史 [完全版]』(2018)でもすでに紹介されているが、もともとはscientific Fantasyという名前で知れ渡っていた、史上初のSF専門誌として1926年に創刊された『アメージング・ストーリーズ』(*Amazing Stories*)の初代編集長のヒューゴ・ガーンズバック(1884-1967)により、scientifictionという造語を作り出し、その後、science fictionとなったと言う。SFは「科学の発想をもとにした空想的小説」⁽⁴⁾であるが、「科学」の取ってしまえば、「発想(想像、幻想)をもとにした空想的小説」となり、これはファンタジーである。ファンタジーを「〈心の願望〉の物語である」⁽⁵⁾と定義するものもある。SFはそのスタートの時点ではファンタジーの一部として見なされ、それが独立的な表現へと発展した。

SFは明治以降の日本の文明開化、欧米化に伴い急速に科学への

関心が高まり、日本でも SF 作品が発表された経緯がある。もちろん、当時はまだ SF という名称はなかったのである。早くも 1900 年には押川春浪『海島冒険奇譚 海底軍艦』が発表されたことは日本の SF 界での草分け的な存在である。

小松左京は『小松左京の SF セミナー』（1982）の中で小説の題材について 5 種に分け、その中で SF が取り扱っている分野について次のように述べている。

- ① 日常的な状況で、平凡な人物が活躍する物語— 一般の小説
- ② 異様な状況に置かれた平凡な人間の物語。
- ③ 日常的な状況で、異様な人物が登場する物語。
- ④ 異様な状況での、その世界の住人の物語—ファンタジー。
- ⑤ 日常的な人や世界が、次第に異化していく物語。

この 5 種のうち、②、③、⑤が SF の題材になるわけです。

さて、賢明なみなさんはすでにお気づきかと思いますが、この節で分類しようとした作品、特に②や④に相当するものは、実は SF が成立する以前からあるのです。⁽⁶⁾

従って SF で特に③と⑤が重要ということになるろう。1920 年にはカレル・チャペック『R.U.R.』の発表により、「ロボット」という言葉が誕生し、その影響は日本に届いている。⁽⁷⁾ 1929 年には『新潮』が「特集：人造人間幻想」を編み、川端康成（1899-1972）も「人造人間譚」を発表している。1950 年にはアイザック・アシモフ（Isaac Asimov, 1920-1992）の『われはロボット』（*I, Robot*）が発表されるとロボット工学三原則が提唱され、SF とはいえロボットと人間の関係が明確に規定されたことは大きなその後大きな影響を与えた SF という言葉が誕生以前に「ロボット」（robot）という言葉が誕生し、日本では「人造人間」と言う言葉がこの分野の代名詞のように

使われはじめ、マンガ、アニメへと入り込んでことは言うまでもないことだ。

2 『宇宙塵』

(1) 時代背景

日本がロボットから宇宙に目を向け始めたのは1950年代ということになりそうだ。1957年にはソ連が世界初の人工衛星スプートニク1号を打ち上げ、まさに宇宙時代が始まった。1961年にはユーリイ・ガガーリン (Yurii Alekseyevich Gagarin, 1934-1968) がボストーク 3KA-2 で世界初の有人宇宙飛行に成功した。さらに1966年にルナ9号が初の月面「軟着陸」を成し遂げた。ソ連に負けじとアメリカもアポロ計画を実施。1969年にアポロ11号により、アメリカ人宇宙飛行士ニール・アームストロング (Neil Alden Armstrong, 1930-2012) が初めて月面を歩いた。これまでにSFの世界とされていた宇宙における人間の活動も現実的となった。注目すべきは1957年の動きであろう。

(2) 日本空飛ぶ円盤研究会

『宇宙塵』の創刊には日本空飛ぶ円盤研究会が深く関わっているという。SFには現実的な側面があり、宇宙に関するものはH.G.ウェルズ『宇宙戦争』(*The War of the Worlds*, 1898)もあるが、欧米では『キャプテン・フューチャー』シリーズなど戦前から宇宙ものがかなり発表されているが、日本でも戦後になって、一般の人が読む翻訳状況を見てもレイ・ブラッドベリー／斉藤静江訳『火星記録』(1956)始め、60年代、70年代になると翻訳者が次々と発表される。1963年から始まった日本の連続TVアニメ『鉄腕アトム』、『スーパージェッター』(1965放映)、『宇宙エース』(1965放映)、

『遊星仮面』（1966 放映）、『宇宙少年ソラン』（1967 放映）、さらに1967 年以降になると実写版の『宇宙特撮シリーズ キャプテンウルトラ』、『ウルトラ』シリーズが開始される。怪獣、ロボット、宇宙がマンガ、アニメ、映画などで大きなジャンルに発展することになる。こうした背景にあるものが日本空飛ぶ円盤研究会と言ってもよいだろう。

今更いうまでもないことだが、『宇宙塵』は空飛ぶ円盤に関心を持つ人を持つ人々のグループから派生した。1947 年 6 月 24 日、アメリカでケネス・アーノルドが未確認飛行物体（UFO）を目撃し、それを「フライング・ソーサー」と形容したことにはじまる空飛ぶ円盤騒動は、その後、アメリカ空軍のトーマス・マンテル大尉が UFO 追跡中に墜落したと伝えられたこともあって、世界中に広まった。日本でも 55 年 7 月 1 日に日本空飛ぶ円盤研究会（JFSA）が発足。会長の荒井欣一は、戦時中は学徒出陣で陸軍航空隊将校となり、戦闘機搭載レーダー整備任務に従事した経験があるという人物で、戦後は大蔵省印刷局に勤務していた。JFSA は北村小松、糸川英夫、石黒敬七、徳川無夢、穂積善太郎らを顧問に、荒正人、新田次郎、畑中武夫らを特別会員に迎え、機関誌『宇宙機』を発行していた。一般会員にも三島由紀夫、黛敏郎、石原慎太郎、黒沼健、平野威馬雄、星新一らがいた⁽⁸⁾。

糸川英夫（1912-1999）は、「日本の宇宙開発・ロケット開発の父」と称されるほどの宇宙工学の専門家であり、三島由紀夫（1925-1970）は 1962 年に異色の長編 SF『美しい星』を発表していることも付け加えておきたい。

(3) 『宇宙塵』

『宇宙塵』(1957年5月～2013年7月)は日本で最初のSF同人誌として知られている。柴野拓美(小隅黎)(1926-2010)が主催したSF同人誌の草分け的存在であり、2013年の204号で廃刊となった。作家陣には星新一(1926-1997)、小松左京(1931-2011)、筒井康隆(b.1934)、光瀬龍(1928-1999)をはじめ、会員には手塚治虫(1928-1989)や三島由紀夫等も会合には顔を出していた。1955年には日本空飛ぶ円盤研究会が設立され、この研究会のメンバーの一部の人たちが『宇宙塵』にも参加した。アニメ制作現場にいた豊田有恒(b.1938)はその著書『日本アニメ誕生』(2020)の中で、『宇宙塵』に触れ次のように述べている。『宇宙塵』の会合であるが、その様子を知ることができる。

手塚治虫との次の出あいは、SF同人誌『宇宙塵』の会合の席だった。SFコンテストに入賞したものの、理系崩れで文章修業などしたことがない。勧められて『宇宙塵』に参加したところ、主宰者の柴野拓美と出会えた。この出会いも、ぼくの人生の収穫のひとつになった。柴野も、まんざらアニメに縁がないわけではなかった。後にタツノコプロ制作のアニメ『新造人間キャシャーン』では、SF設定と監修を担当している。東工大卒で、高校の数学、理科の教師を長らく務めてきた柴野のおかげで、SF心に長けた人の少ないタツノコプロ作品としては、考証のしっかりした作品仕上がった。

話が先走った。『宇宙塵』の月例会は、柴野宅に近い蕎麦屋の2階で行われたのだが、そこで後にSFの同誌となる多くの人々と、知り合うことができた。御大の星新一をはじめ、広瀬正、光瀬龍、平井和正、野田宏一郎など、SF仲間ができて、おおいに話が盛り上がったものである。何度目かの月例会の席で、手塚治虫と再

会した。(9)

豊田はこの『宇宙塵』の会合で手塚が『鉄腕アトム』のシリーズアニメ化を発表したとも述べている。(10)

なお、『宇宙塵』が創刊された1957年にはソ連がスプートニク1号打ち上げなど、現実でも宇宙時代の幕開けとなっていることも注目に値する。さらに1961年にはソ連のガガーリンが搭乗した史上初の有人宇宙船ボストーク1号が宇宙空間に達した。マンガを諷刺画の流れから捉えた清水勲編『近代日本漫画百選』(1997)でも新聞掲載の諷刺画に言及しながら、次のように述べている。

スプートニクの衝撃

昭和32年9月20日、東京大学の糸川英夫教授らが秋田海岸で国際ロケット1号機、いわゆるペンシル・ロケットの打上げに成功した。その2週間後の10月4日、ソ連が人工衛星スプートニク1号の打上げに成功し、全世界を驚嘆させた。これは社会主義国家に未来が開け、資本主義国家はやがて敗北するのではないかという印象を世界の人々に与えた。宇宙開発競争の一番乗りを目指していたアメリカのショックも大きかった。(11)

SFも現実の科学の発達とリンクするのは当然のことである。アメリカはその後宇宙開発に向けて動き出し、NASAにより人間が宇宙空間で活動するために人間を改造する必要があると感じ、Cybernetic Organism、すなわちサイボーグ(Cyborg)を提唱したのは1960年のことである。1961年にはアポロ計画が打ち出され、1969年にはアポロ11号が人類初の月面着陸に成功したのである。

岡田斗司夫『オタクはすでに死んでいる』(2008)ではSFファンについて次のように述べている。

かつて、SFファンという人種がいました。そしてSF大陸というところが、かつてはありました。つまり「細かい好みの差はいろいろあるけれど、まあみんなSFファンってことで」というふうに、みんながSF大陸に住んでいた時代があったのです。

細かいことを言い出せば、SFと一口に言ってもいろいろあるわけですね。それは昔、大陸があった頃も今も同じです。小説でも小松左京や筒井康隆のような日本の作家のものを好む人もいれば、欧米のものがいい、という人もいます。ソ連が一番、という人がいれば、それ以外の東欧がいい、という人もいます。さらにSF映画ファンもいれば、SFマンガファンもいるし、宇宙船などの模型やプラモデルが凄く好きな人もいました。(12)

オタクが誕生する以前としてSFファンに注目した吉本たいまつ『おたくの起源』(2009)では次のように取り上げている。

「おたく」という言葉ができる前には、自らを「おたく」と認識する人はいなかったし、外部から「おたく」を指し示される存在もなかった(当然のことだが)。しかし現在のおたくの源流ともいえる感じ方、考え方、楽しみ方は存在したし、そそれは次第に洗練され、広まっていった。現実には存在しな「イマジナリーな文化」を楽しむ人たちが形成されていた。そのさきがけとなったのは「SFファンダム」である。

1950年代の半ばから末にかけて、SFのファン団体を作る動きが現れる。1956年、荒井欣一らによって「空飛ぶ円盤研究会」が作られた。この時点ではSFが中心ではなく、UFOの中心に不思議なこと、宇宙開発のこと、空想科学のことを総合的に扱う会だった。三島由紀夫や黛敏郎も会員に名を連ねていた。(13)

3 オタク文化の源泉か

『宇宙塵』を創刊した柴野拓美が2010年1月16日に亡くなった。その後、『宇宙塵』は2013年7月に第204号を以て最終号となった。最終号には長山靖生「戦後文化史に『宇宙塵』と柴野拓美が果たしたものの」が掲載されている。その中で次のように述べている。

1957年5月に創刊された『宇宙塵』は、時代的にはそのような文芸同人誌運動と重なっている一方、現代のオタク的同人誌文化の淵源でもある感性を、出発の段階から備えていたように思う。

ブライアン・W・オールディスは『一兆年の宴』のなかで、諸ジャンルのファンダムはSFファンダムから始まったと述べた上で、その体質は驚くほど元祖に似ていると指摘している。この事情は日本でも変わらない—というよりも、日本でこそ顕著だというべきであろう。SFファンと漫画ファンは終戦直後の手塚マンガ時代からかなり重なっていたが、マンガファンの集りであるマンガ大会やコミック・マーケットが、SF大会の形式と精神を範としていたことはよく知られている。さらにそこからフィギュア中心のワンダー・フェスティバルも派生した。⁽¹⁴⁾

コミックマーケットではSFとBLの果たした役割が大きいことは言うまでもないことだ。また、長山は柴野拓美が「おたく」のこたばを使用していたとの記述も気になるころだ。

「おたく」という二人称は、柴野が60年代から80年代初頭にかけて、特別な意味合いを込めて使用していた言い回しだった。

(15)

「おたく」は一般的には 1983 年の雑誌『漫画ブリッコ』の以下の 3 つの連載で紹介されたことにより、世間一般に流布されるようになった。

『おたく』の研究 (1) 街には『おたく』がいっぱい (6 月号) ⁽¹⁶⁾

『おたく』の研究 (2) 『おたく』も人並みに恋をする? (7 月号) ⁽¹⁷⁾

『おたく』の研究 おたく地帯に迷い込んだで (8 月号) ⁽¹⁸⁾

ここで取り上げられているのは 1975 年より開催されるようになったコミックマーケットの様子が関係している。

大澤真幸「オタクという謎」(2006)でも次のように述べている。

1983 年に「オタク」が発見されたということは、オタクは、それより少し前、つまり 1970 年代のごく初頭を起源としている、と考えるのが妥当であろう。⁽¹⁹⁾

柴野拓美は日本の SF を支えて来たひとりであり、結果的にオタク文化を支えたひとりでもある。

エピローグ

『宇宙塵』について触れるにはオタク前史との関わりについて論じる必要がある。戦前からブームが発生していたロボット、その後宇宙時代を迎えることとなった時代背景を受け、これまでのファンタジーから SF は独立的な地位を得ることとなった。1963 年に TV

アニメの『鉄腕アトム』が放映される以前に SF の果たした役割は大きい。こども達の想像力を掻き立て、ファンタジーから科学を背景にした宇宙ものへの関心が高まったのがまさに 1950 年代である。実際に有人宇宙ロケットの打ち上げの成功、その後人類初の月面着陸などと宇宙開発は加速度的に進んだ。SF は想像力と実際の科学の発達を背景に次々と新しい世界を作り上げた。小説として描かれた世界は、マンガという絵を中心にした媒体へ、やがて動画として TV アニメの登場へとつながる。『宇宙塵』の会員はやがて TV アニメの原作者として活躍していく。

オタク文化の源泉をひとつに限定する必要性はなく、複数の要因が 1975 年のコミックマーケットの開催したことに集約されたと言ってもよいかもしれない。その根底を築き上げたのが『宇宙塵』なのだ。

注

- (1) 「オタクの原点を求めて—SF と『宇宙塵』については、拙著『書誌から見た「オタク」研究 増補版』（前編、多生堂、2021 年 5 月）の「1 オタク前史」では SF といわゆる鉄道小僧について注目したが、ここで SF に絞り再考した。
- (2) SF に関する考察については拙著『文芸上・映像上の人造人間・ロボット・アンドロイド・サイボーグ』（前編、武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2021 年 8 月）の「1 SF と人造人間・ロボット」で一度行っている。
- (3) 新村出編『広辞苑』（岩波書店、2018 年 1 月）、p.324.
- (4) Ditto.
- (5) デヴィッド・プリングル編／井辻朱美日本語版監修『図説ファンタジー百科事典』（東洋書林、2002 年 11 月）、p.6.

- (6) 小松左京『小松左京のSFセミナー』（集英社、1982年6月）、pp.54-55.
- (7) 佐々木隆『文芸上・映像上の人造人間・ロボット・アンドロイド・サイボーグ』（中編、武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2021年8月）、pp.435-448.
- (8) 長山靖生「戦後文化史に『宇宙塵』と柴野拓美が果たしたものの」（『宇宙塵』第204号、宇宙人月例会事務局、2013年7月）、p.6.
- (9) 豊田有恒『日本アニメ誕生』（岩波書店、2020年8月）、p.10.
- (10) Ibid., p.11.
- (11) 清水勲編『近代日本漫画百選』（岩波書店、1997年2月）、p.230.
- (12) 岡田斗司夫『オタクはすでに死んでいる』（新潮社、2008年4月）、pp.114-115.
- (13) 吉本たいまつ『おたくの起源』（NTT出版、2009年2月）、p.16.
- (14) 長山靖生「戦後文化史に『宇宙塵』と柴野拓美が果たしたものの」、p.3.
- (15) Ibid., p.15.
- (16) 中森明夫『『おたく』の研究（1） 街には『おたく』がいっぱい』（6月号）
(<http://www.burikko.net/people/otaku01.html>)(2023年6月8日アクセス)
- (17) 中森明夫『『おたく』の研究（2） 『おたく』も人並みに恋をする？』（7月号）
(<http://www.burikko.net/people/otaku02.html>)(2023年6月8日アクセス)
- (18) 中森明夫『『おたく』の研究 おたく地帯に迷い込んだで』（8月号）
(<http://www.burikko.net/people/otaku03.html>)(2023年6月8日

アクセス)

(19) 大澤真幸「オタクという謎」(『フォーラム現代社会学』第5号、
関西社会学会、2006年5月)、p.26.

【キーワード】オタク、柴野拓美、SF、『宇宙塵』、日本空飛ぶ円盤
研究会